



速報版

# 幼児期から小学1年生の 家庭教育調査

縦  
断  
調  
査

年少児から小学1年生までの縦断調査データから  
幼児期の家庭における  
「子どもの学びの見通し」を考える

ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp/jisedai/>

2016年3月



# 調査の背景

## ●世界の幼児教育の流れ

経済のグローバル化やITによる情報化など、国際的に社会環境の変化が加速しています。既存の知識を身につけるだけでなく、環境に柔軟に適応し、学び続け、課題を解決しようとする姿勢や力が必要と考えられるようになってきました。また、個人の成長を長い目で見るとき、そのような姿勢や力を幼児期に身につけることの重要性に注目が高まっています。

## ●国内の幼保小接続期への取り組み

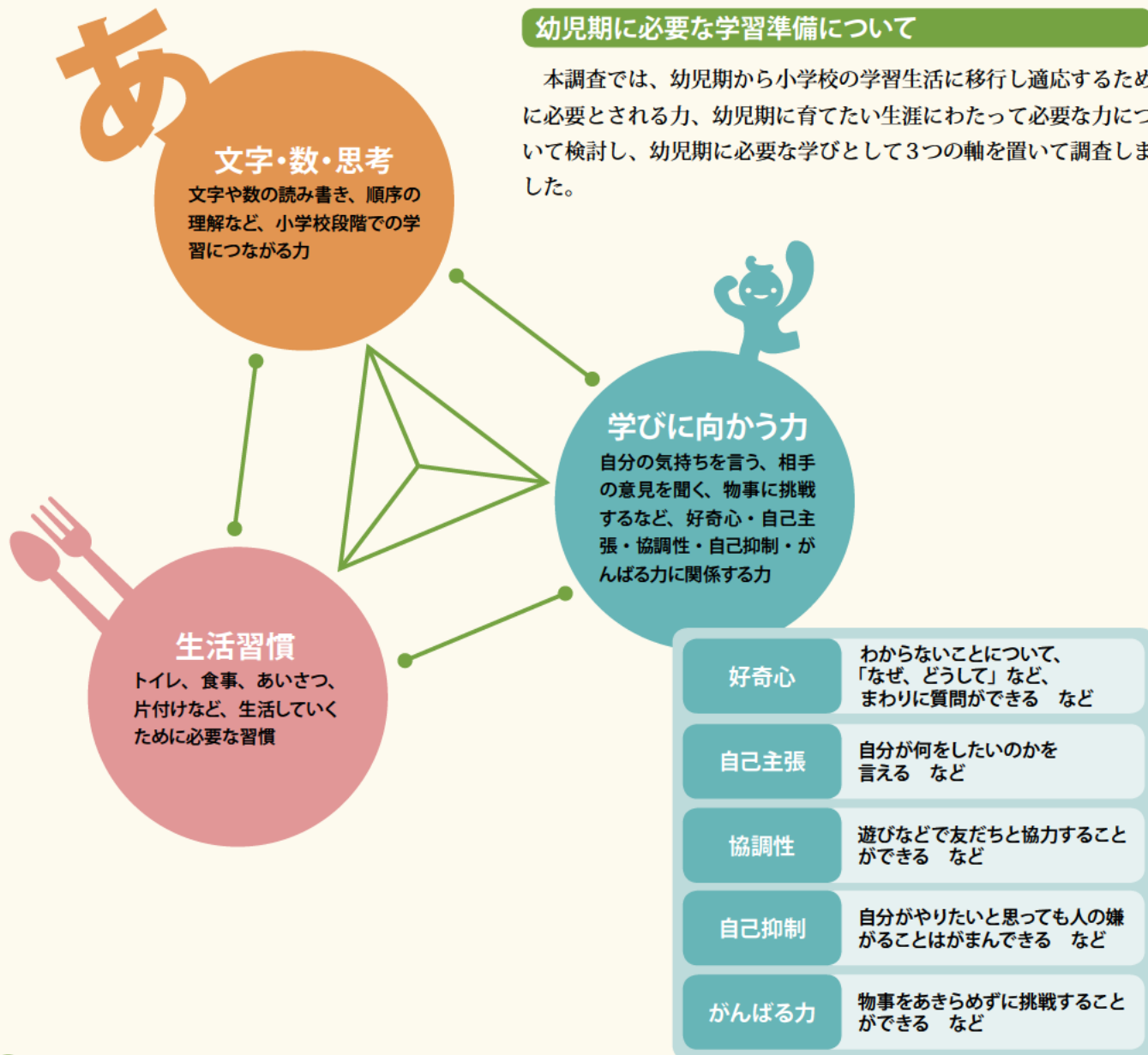
幼児から小学生までの時期は、学びの基礎力を培う時期とされています。そこで、幼児期の教育・保育と小学校の教育が子どもの発達に合わせてスムーズにつながるように、幼稚園・保育園・認定こども園などの園と小学校で、接続カリキュラムなどの試みが始められています。

## ●データによるエビデンスへの要望

幼児期の学びのプロセスと学びを促す環境について、国内では園や家庭での活動と関わりを通じた研究が数多くされています。現在、それに加えて、データの収集と分析によるエビデンスの構築が求められています。

### 幼児期に必要な学習準備について

本調査では、幼児期から小学校の学習生活に移行し適応するために必要とされる力、幼児期に育てたい生涯にわたって必要な力について検討し、幼児期に必要な学びとして3つの軸を置いて調査しました。



# 調査について

本調査では、2012年に年少児から小学1年生までの子どもの家庭での生活や育ちの様子と親の関わりについての実態を横断的に把握しました。2012年より年少児の子どもを持つ母親を対象に調査し、2013年以降も毎年、子どもの学びが育つプロセスと家庭での学びの状況を探る継続調査を実施しています。今回の速報版は、縦断調査のうち、年少児期から子どもが小学1年生になった時点までの母親544名のアンケートを分析したものです。



## 調査概要

調査テーマ ● 幼児期から小学校入学期までの子どもの学びの様子と、親の関わりや意識

調査方法 ● 郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査対象 ● 子どもが年少児から小学1年生までの縦断調査に同意し、調査に中断することなく継続して参加した母親

サンプル数 ● 544サンプル

調査地域 ● 日本全国

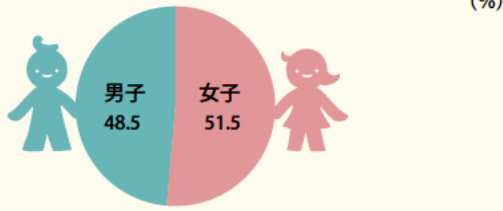
調査項目 ● 子どもの生活時間／子どもの学びの様子／母親の関わり／母親と父親の役割分担／園・小学校の満足度／母親の周囲との関わり／習い事／読み聞かせなど

調査時期 ●

年少児期	2012年1～2月
年中児期	2013年1～2月
年長児期	2014年1～2月
小1期	2015年3月

# 基本属性

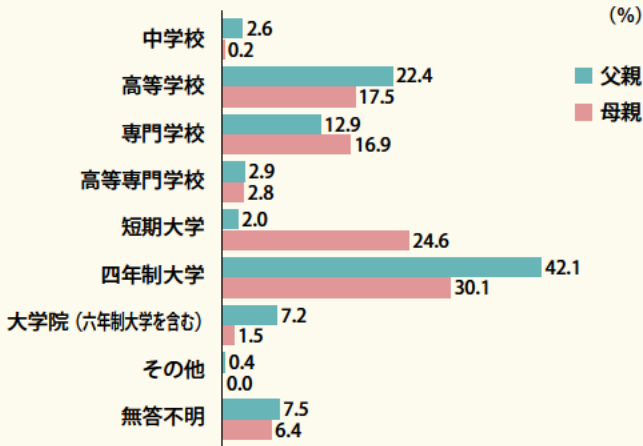
## 子どもの性別



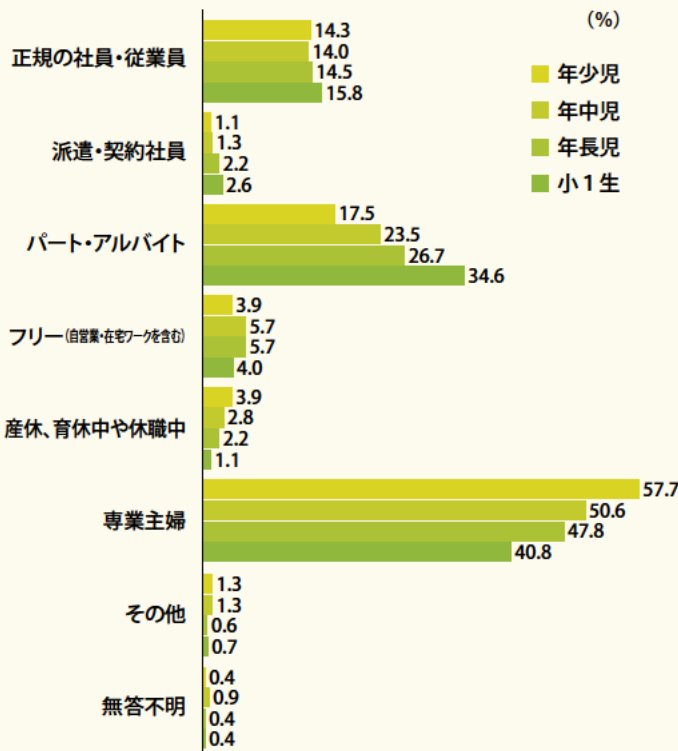
## 出生順位



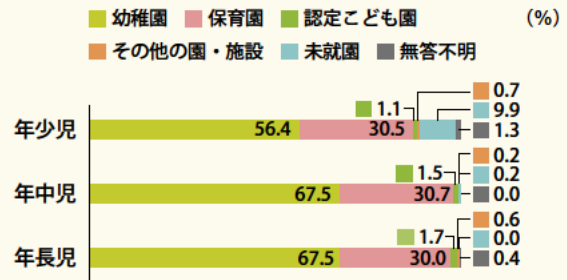
## 親の最終学歴 (小1)



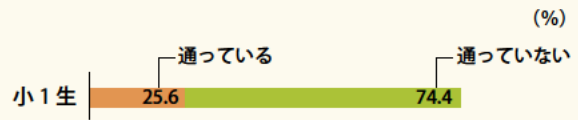
## 母親の就業状況



## 就園状況



## 学童保育の状況

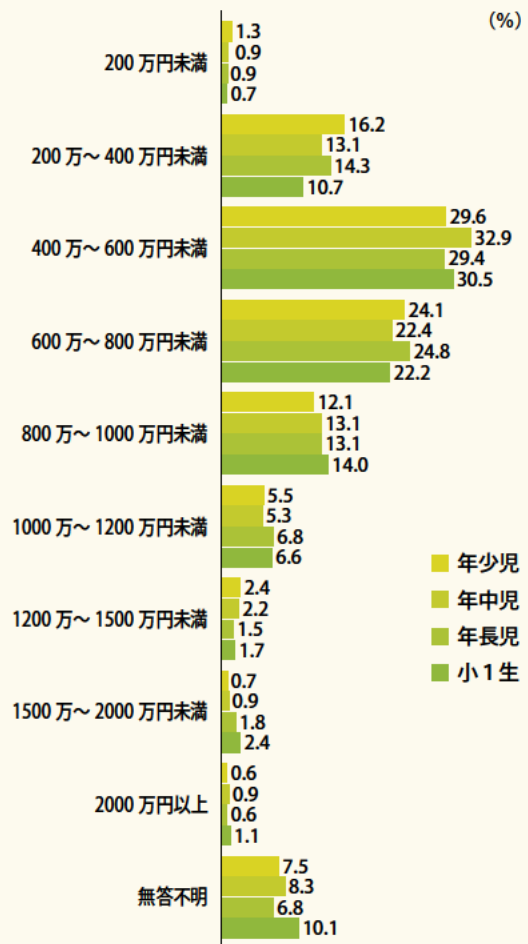


## 親の平均年齢

	年少児 (歳)	年中児 (歳)	年長児 (歳)	小1生 (歳)
父親	38.4	39.5	40.4	41.5
母親	36.6	37.6	38.5	39.7

※無答不明の人は、分析から除外。

## 世帯年収



# 速報版の特徴

幼児期から小学1年生で学習生活がスタートする時期、家庭では、子どもの育ちをどのように支え、子どもが環境に柔軟に対応し、学び続け、課題を解決できるようにすればよいのでしょうか。

その見通しを持つためのひとつとして、国内では少ない縦断調査を行い、幼児期から小1期の学びの育ちを分析しました。この速報版では子育て世代の視点に立ち、子どもたちと家族にとってよりよい環境をつくるとともに、サポートする方々の活動の一助となることを目指しています。

幼児から小学生になる時期、  
どうしたら子どもは自分で考え、  
解決していけるようになるのか？

幼児期にどのような力を  
育てることが大切か？  
家庭で保護者は  
どう支えていくことが大切か？



縦断データをもとに、



4つのポイントから見ていきます。

- ポイント** 1 幼児期から小1期の学びの育ち →
- ポイント** 2 子どもの学びが育つプロセス →
- ポイント** 3 親の関わりの変化 →
- ポイント** 4 小1期の学習態度と年長児期の親の関わり →

## ご家族のかたへ

この調査は、ご家庭でのよりよい子どもの育ちや親の関わりを明らかにするために実施しました。就学前のお子様を持つご家族のかたが子どもの育ちについて小学校入学までの見通しを持って考えられること、大切となるポイントを知り子育てをするうえで工夫できることを目指しています。日々のお子様との関わり方のヒントにいただければ、心よりうれしく存じます。

## 園や小学校現場のかたへ

年少児（3歳児クラス）から小学1年生までの4年間を、同一の方に毎年調査することで、幼保小接続の時期に、ご家庭で子どもをどのように育てているかが少しずつわかってきました。保育・幼児教育、小学校教育を通して子どもの育ちを支え、保護者との関係を築き、園と小学校の連携のあり方を考えていくときのご参考にいただければ幸いです。

# 1 幼児期から小1期の学びの育ち

子どもは年少児期から小1期の4年間で、どのように成長するのでしょうか。

幼児期に必要な学習準備の3つの軸《生活習慣》《文字・数・思考》《学びに向かう力》にそって、その推移を見ていきます。

※幼児期の学びに必要な学習準備の軸とは：小学校以降の学習の基盤として、自立した生活習慣や物事への集中力、人と協力して物事に取り組む力が重要視されています。本調査では、小学校入学以降の学習生活に適応するために必要とされる力、幼児期に育てたい生涯にわたって必要な力として、3つの軸を設定しました。

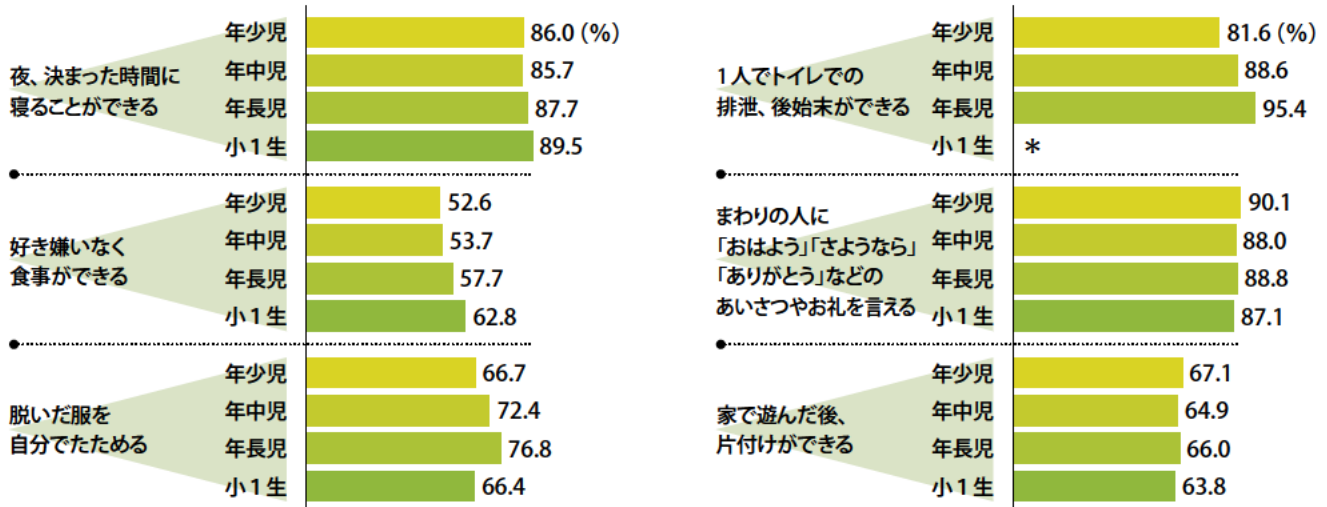
## Q 現在、お子さまは、どれくらいあてはまりますか？

### 生活習慣



### 生活習慣

図 1-1 とてもあてはまる+まああてはまる

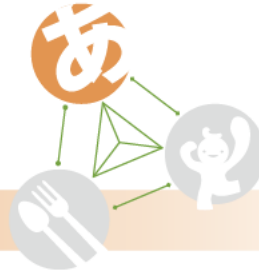


\* 年少児から年長児までの項目

### 解説

《生活習慣》では、決まった時間に寝られるのは8割強。好き嫌いでなく食事ができる、片付けができるのは5～6割。

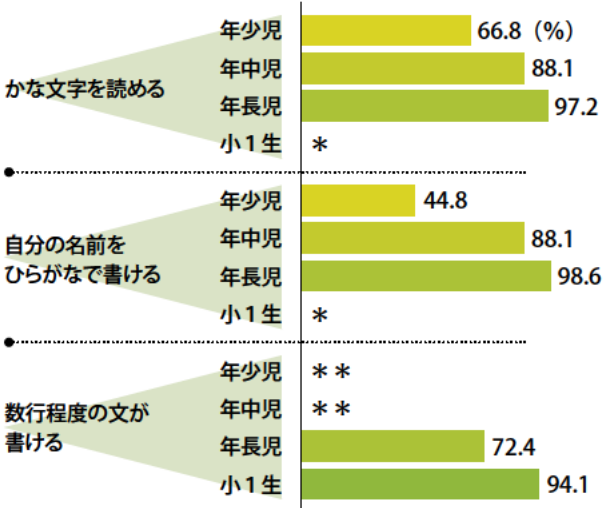
図 1-1 をみると、「夜、決まった時間に寝ることができる」は、年少児期ですでに86.0%が「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した。一方、「好き嫌いでなく食事ができる」は小1期で62.8%にとどまった。小学校では、登校時間が定まり、給食や授業に合わせた着替えが日常的になる。食事の好き嫌いがあつたり、身の回りがなかなか整えられないなど、求められるレベルにすぐに達せない子ども一定程度いることがうかがえる。



## 文字・数・思考

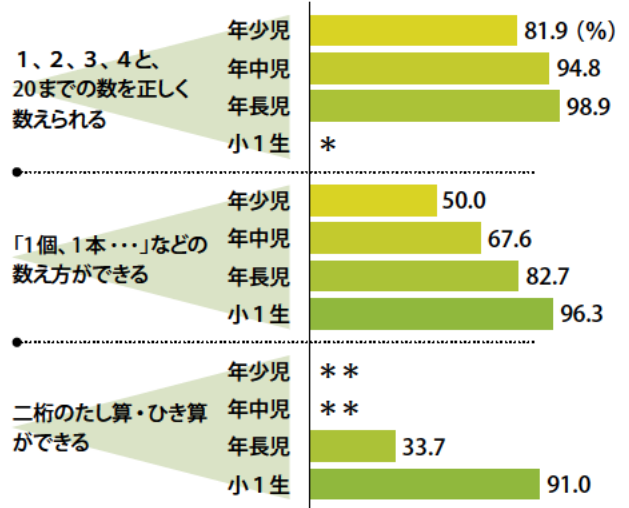
### 文字

図 1-2 とてもあてはまる+まああてはまる



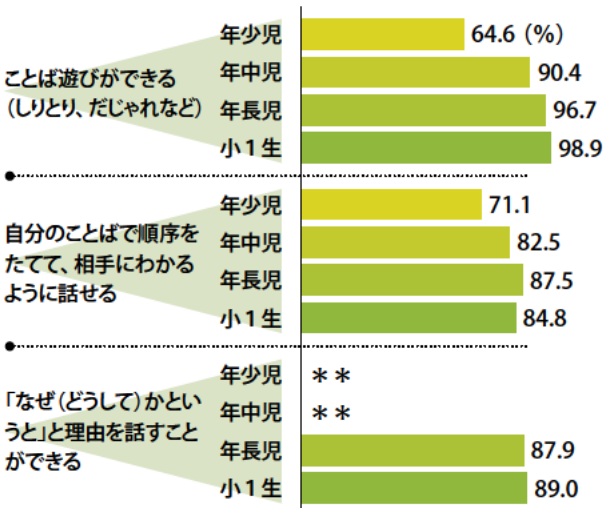
### 数

図 1-3 とてもあてはまる+まああてはまる



### 言葉

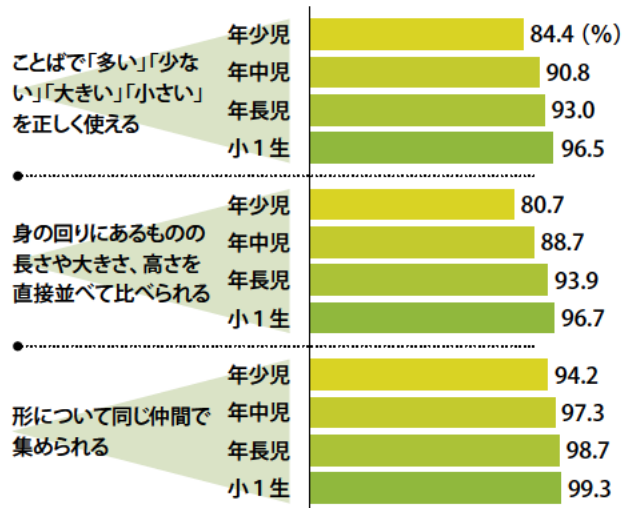
図 1-4 とてもあてはまる+まああてはまる



\* 年少児から年長児までの項目  
\*\* 年長児以降の項目

### 分類する力

図 1-5 とてもあてはまる+まああてはまる



### 解説

《文字・数・思考》で、  
文字・数の力は大きく伸びる。

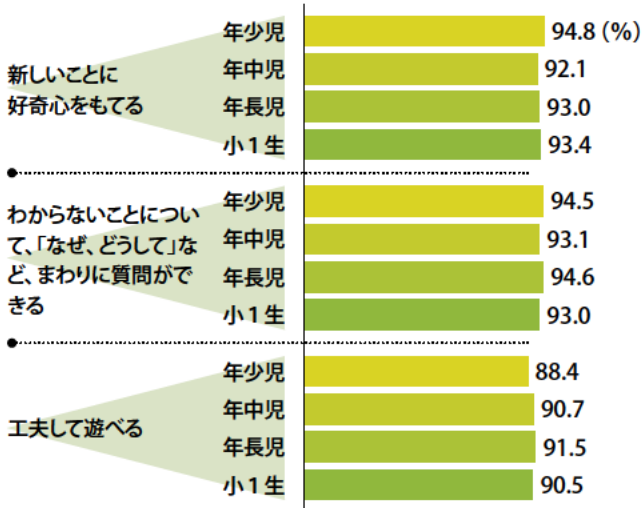
「文字」と「数」は大きく伸び、図1-3の「二桁のたし算・ひき算ができる」は、年長児期(33.7%)から小1期(91.0%)で57.3ポイント増えた。一方、順序をたてて話すなどの「言葉」や、形について同じ仲間を集めるなどの「分類する力」は、年中児期から小1期でいずれも8~9割を占めた。



## 学びに向かう力

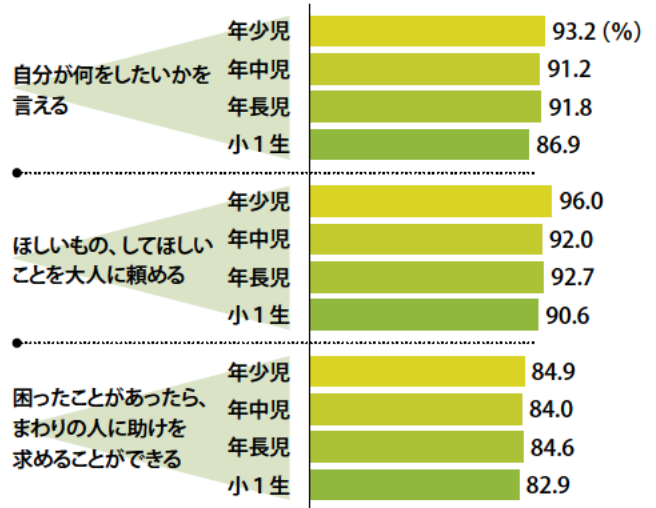
### 好奇心

図 1-6 とてもあてはまる+まああてはまる



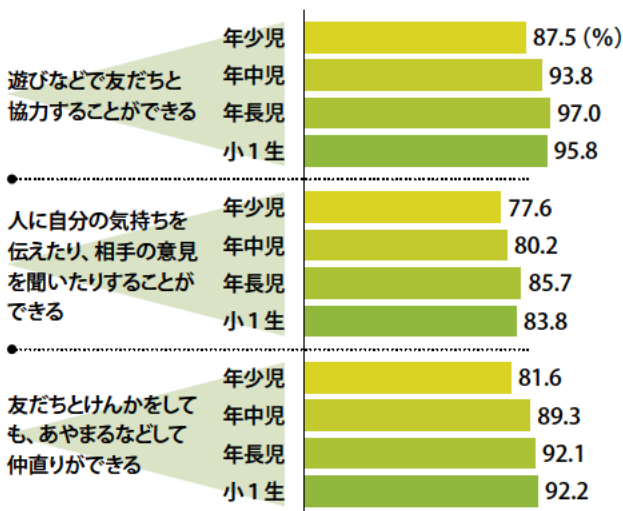
### 自己主張

図 1-7 とてもあてはまる+まああてはまる



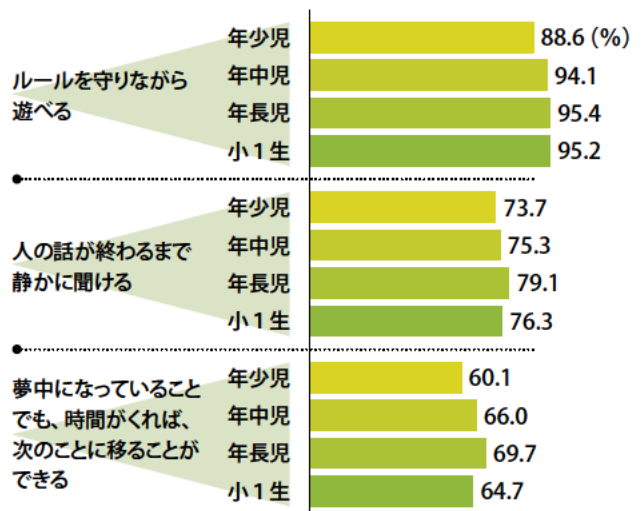
### 協調性

図 1-8 とてもあてはまる+まああてはまる



### 自己抑制

図 1-9 とてもあてはまる+まああてはまる

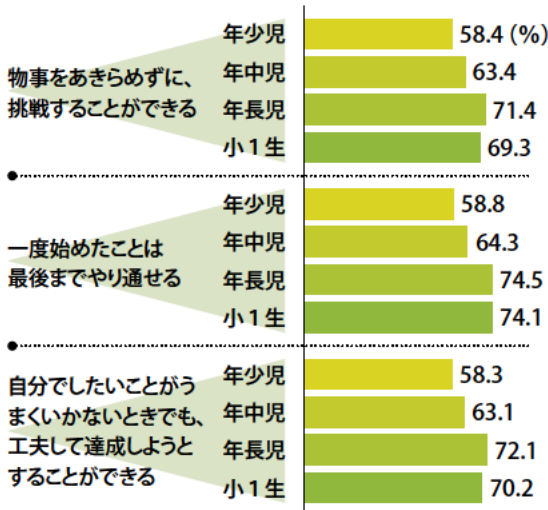






## がんばる力

図 1-10 とてもあてはまる+まああてはまる



### 解説

《学びに向かう力》は、年長児期までゆるやかに成長し、小1期にやや減るものもある。

4年間の推移をみると、図1-6の「好奇心」は高いままだった。図1-7の「自己主張」はやや減っていく一方、図1-8の「協調性」や図1-9の「自己抑制」、図1-10の「がんばる力」は、年長児期まで増えていき、小1期にやや減る傾向がみられた。

幼児期において、子どもが成長するに従い、自己主張をおさえ、他者と関わりながら育む協調性や自己抑制、がんばる力をゆるやかに伸ばす様子うかがえる。また、小学校に入るとやや減るのは、生活環境の変化による影響も考えられる。



### 21世紀に求められる力と「学びに向かう力」はどんな関係か

#### 調査研究会より

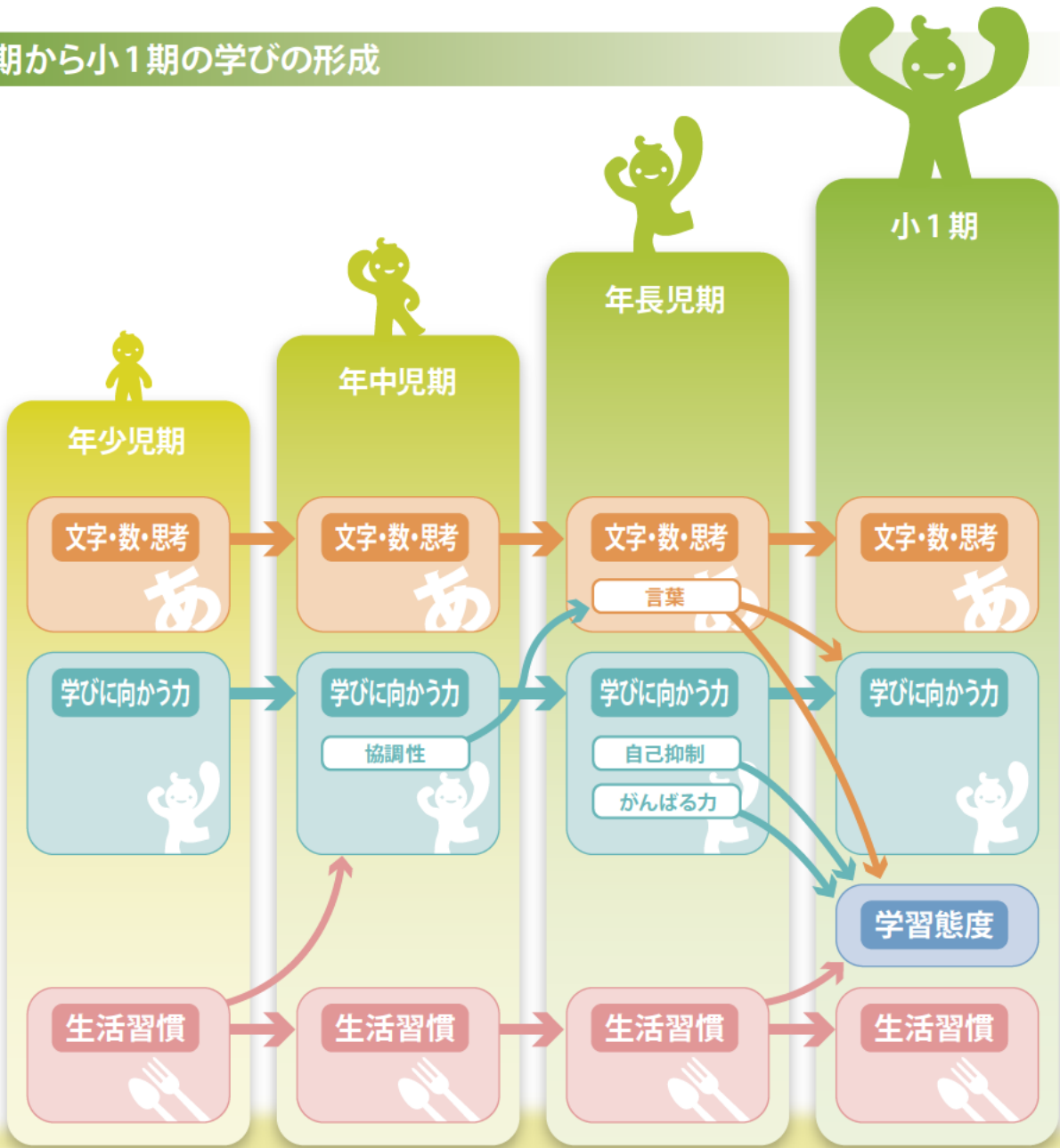
グローバル化や情報化など社会環境の変化に柔軟に対応できるために、現在、小学校以降の教育でも「知識・技能」の習得に加え、「汎用的能力」を重視しようという議論が進められています。汎用的能力とは、問題解決力や批判的思考力、コミュニケーション力、情報活用力、計画遂行力といった教科の枠組みを超えた力のことで「21世紀型スキル」「21世紀型能力」とも呼ばれています。「学びに向かう力」は、そうした能力のベースになっていると考えられています。

# 2 子どもの学びが育つプロセス

幼児期の3つの軸《生活習慣》《学びに向かう力》《文字・数・思考》は、それぞれが個々に育っていくのでしょうか。それとも互いが影響しあって育つのでしょうか。4年間の縦断データから明らかになった子どもの学びが育つプロセスをご紹介します。

## 幼児期から小1期の学びの形成

図 2-1



※太い線は影響の大きかったもの、細い線は影響のやや大きかったものを表している。



## 子どもの学びは、 幼児期から小1期にかけて、《生活習慣》が土台となり、 《学びに向かう力》と《文字・数・思考》が影響し合い 成長していく。

年少児期から小1期の縦断データをもとに、前の学年が次の学年にどう影響しているのかを分析し、影響の大きかったものを抽出した。

図2-1をみると、3つの軸《生活習慣》《学びに向かう力》《文字・数・思考》はそれぞれ、前の学年の力が次の学年の力の成長につながっていた。また、年少児期の《生活習慣》が年中児期の《学びに向かう力》の成長につながり、年中児期の《学びに向かう力》（「協調性」）が年長児期の「言葉」の力につながっていた。さらに、年長児期の《文字・数・思考》（「言葉」）は小1期の《学びに向かう力》の多くの項目につながっていた。

3つの軸	内容	項目の代表例
文字・数・思考	文字	・かな文字を読める など4項目**
	数	・「1個、1本…」などの数え方ができる など3項目**
	言葉	・自分の言葉で順序をたてて、相手にわかるように話せる など4項目**
	分類する力	・身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる など4項目**
学びに向かう力	好奇心	・わからないことについて、「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる など5項目
	自己主張	・自分が何をしたいかを言える など5項目
	協調性	・遊びなどで友だちと協力することができる など5項目
	自己抑制	・人の話が終わるまで静かに聞ける など6項目
	がんばる力	・物事をあきらめずに、挑戦することができる など4項目
生活習慣	生活習慣	・夜、決まった時間に寝ることができる など7項目*

\* 発達に合わせて、小1期では6項目。

\*\* 発達に合わせて、年長児期、小1期で項目内容と項目数が異なる。

## 2 子どもの学びが育つプロセス

### 年長児期での「言葉」得点

図 2-2



\* 明らかな差がみられた。

※得点の出し方：各項目において、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出した。すべて回答した人のみ分析した。

※協調性3群：「遊びなどで友だちと協力することができる」「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」「友だちとけんかをして、あやまるなどして仲直りができる」「遊ぶとき、『入れて』『一緒に遊ぼう』『貸して』など友だちに声かけができる」の4項目について算出し、平均点を3区分した。

※年長児期の言葉得点：「ことば遊びができる」「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」「『なぜ（どうして）か』と理由を話することができる」「見聞きしたことをまわりの人に話することができる」「絵本や図鑑を1人で読める」「テーマを与えられ、自分で話を作ることができる」の6項目について平均点を算出した。

※( )内はサンプル数。

### 解説

## 年中児期の「協調性」が、年長児期の「言葉」の力につながる。

544人について、年中児期に「協調性」がどれくらい身についていたかを3群に分け、年長児期での「言葉」得点を比べた。図2-2をみると、「言葉」得点は、協調性高群が3.60点、中群が3.25点、低群が3.08点だった。分析の結果、各群の間で明らかな差がみられた。年中児期に「協調性」が身につけているほど、年長児期に「言葉」得点が高い傾向にあることが読みとれる。協調性は、自分と相手の気持ちや考えを調整して自分の力を出していくことともいえ、他者と関わりながら育まれる。調査の結果から、協調性を育むことは、「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」や「絵本や図鑑を1人で読める」などの「言葉」の力につながるがみえてきた。

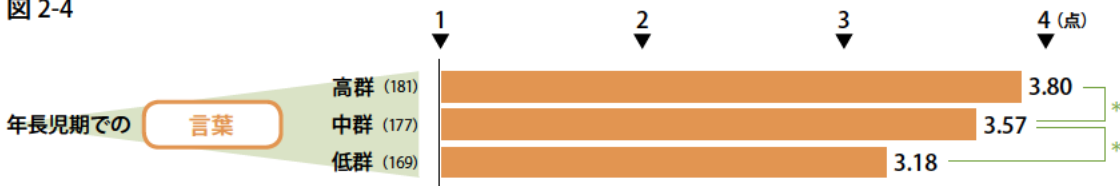
## 小1期での《学びに向かう力》得点

図 2-3



## 小1期での《文字・数・思考》得点

図 2-4



\* 明らかな差がみられた。

※年長児期の言葉3群：「ことば遊びができる」「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」「なぜ（どうして）か」と理由を話すことができる」「見聞きしたことをまわりの人に話することができる」「絵本や図鑑を1人で読める」「テーマを与えられ、自分で話を作ることができる」の6項目について算出し、平均点を3区分した。

※小1期での《学びに向かう力》得点：小1期での「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」の24項目について平均点を算出した。

※小1期での《文字・数・思考》得点：小1期での「文字」「数」「言葉」「分類する力」の16項目について平均点を算出した。

※( )内はサンプル数。

## 解説

 年長児期の「言葉」の力が、  
 小1期の《学びに向かう力》《文字・数・思考》につながる。

図2-2と同様に、年長児期に「言葉」がどれくらい身についていたかを3群に分け、小1期の《学びに向かう力》得点と《文字・数・思考》得点を見た。図2-3をみると、《学びに向かう力》得点は、言葉高群が3.35点、中群が3.13点、低群が2.89点だった。また、《文字・数・思考》得点は、言葉高群が3.80点、中群が3.57点、低群が3.18点だった。分析の結果、各群の間で明らかな差がみられた。「言葉」の力が身につけているほど、《学びに向かう力》と《文字・数・思考》につながるということがわかった。

## 調査研究会より

 毎日の遊びや生活のなかで、  
 《学びに向かう力》と《文字・数・思考》を育むには

子どもの遊びや生活のなかで《学びに向かう力》と《文字・数・思考》はどのように育まれるのでしょうか。例えば、積み木で建てものをつくる時、積み木の形や大きさやバランスを考えたり、つくりたいものをイメージして言葉で表したり、イメージに近づけるためにどう工夫するか考えたりする必要があります。これらは《文字・数・思考》の力になります。さらに、こんな建てものをつくりたいという気持ちや完成に向かってがんばる姿勢は《学びに向かう力》と言えます。完成できたら、達成感から自信がつき、《学びに向かう力》はさらに伸びるでしょう。積み木の形や大きさに対する知識やバランスを考える力も高まります。

このように、日頃の活動が子どもにとって意味があり、子どもが探究できることで《学びに向かう力》と《文字・数・思考》は関連しながら伸びていきます。さらに、様々な人やものと関わることで、子どもの学びは広がり、柔軟に適応していく力へとつながると考えられます。

# 3 親の関わりの変化

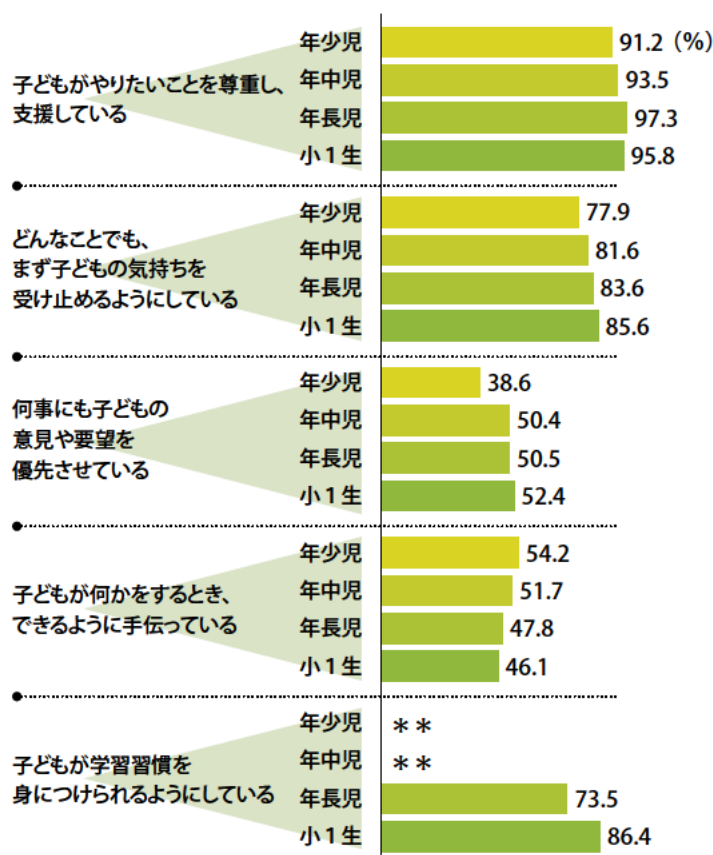
子どもが年少児期から小1期に成長する時期、家庭で親子はどのように関わっているのでしょうか。4年間の推移と小学校入学後の関わりを、子どもの学びに関連が深いものを中心に見ていきます。

## 親の関わり

### Q 日頃、お子さまとの生活の中で、どれくらいあてはまりますか？

#### 養育態度

図 3-1 とてもあてはまる+まああてはまる



\*\* 年長児以降の項目

解説

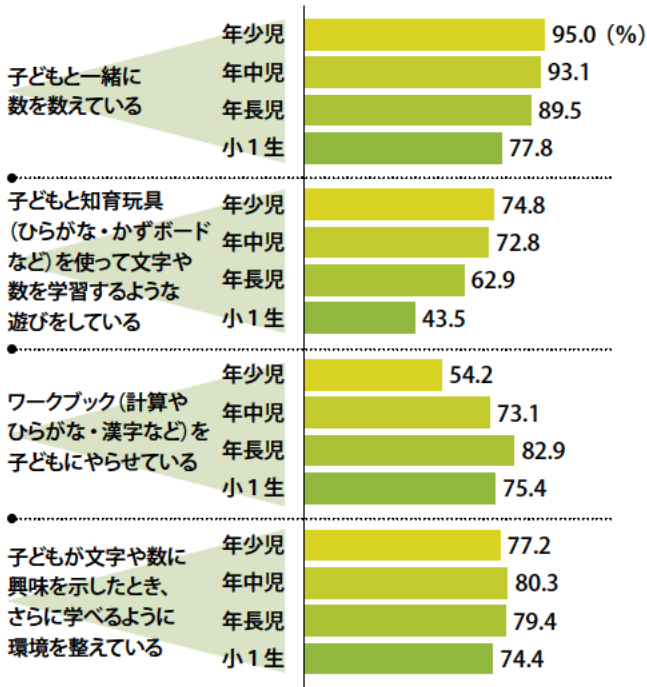
### 親は、子どもが何かをするときに手伝うことから意欲を尊重して支えることへ移り変わる。

図3-1で、親の養育態度について4年間の推移をみると、「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」や「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」が増えていた。一方、「子どもが何かをするとき、できるように手伝っている」は減った。子どもの成長に合わせて、親は子どもが何かをするときに直接支えることから、子どもの意欲を大切に支えることに移り変わる様子が見えてくる。

## Q 日頃、お子さまとの生活の中で、あなたはどれくらいしていますか？

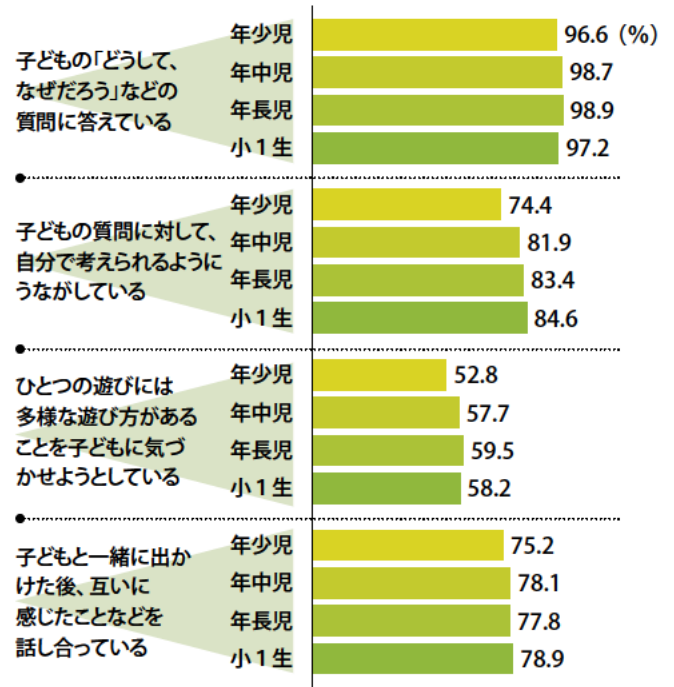
### 学びの環境を整える関わり

図 3-2 とてもあてはまる+まああてはまる



### 子どもの思考を促す関わり

図 3-3 とてもあてはまる+まああてはまる



## 解説

学びの環境を整える関わりは、子どもの年齢で変化。  
 子どもの思考を促す関わりは変わらない。

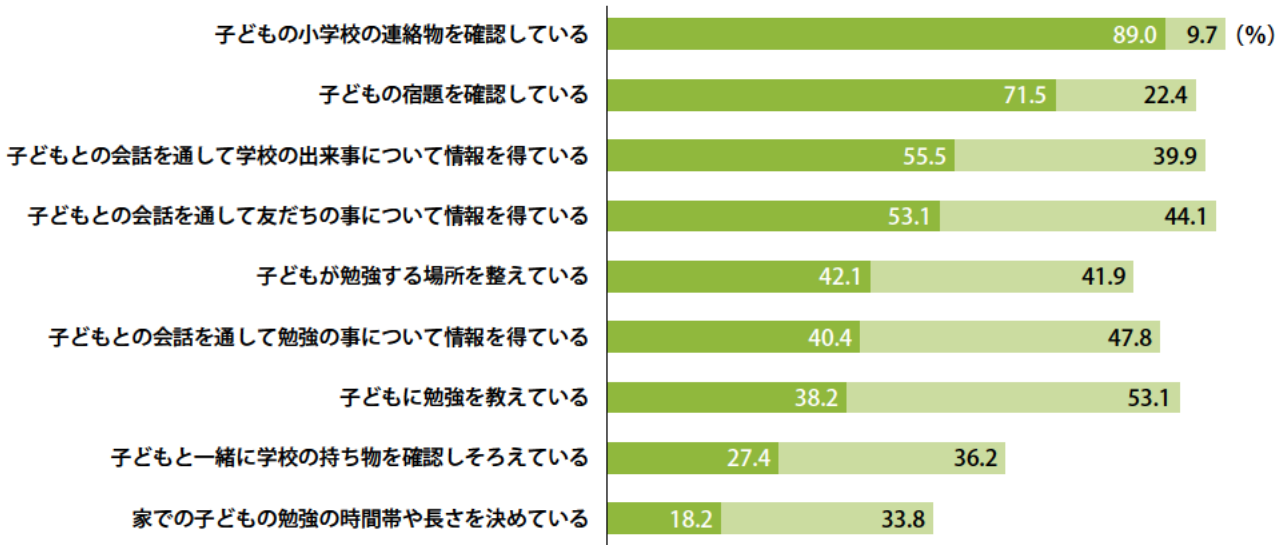
図3-2で学びの環境を整える関わりについて比率のもっとも高い時期をみると、「子どもと知育玩具を使って文字や数を学習するような遊びをしている」は年少児期の74.8%、「ワークブックを子どもにやらせている」は年長児期の82.9%だった。また、図3-3で子どもの思考を促す関わりをみると大きな変化がみられず、「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている」と回答した親は年中児期から小1期にかけて8割台だった。

### 3 親の関わりの変化

#### 学校生活や家庭学習への働きかけ(小1)

#### Q 日頃、お子さまとの生活の中で、どれくらいあてはまりますか？

図 3-4 ■ よくある ■ ときどきある



#### 解説

#### 小学校入学後、子どもの宿題を確認している親は、「よくある」で71.5%。

図3-4をみると、「子どもの小学校の連絡物を確認している」は「よくある」で89.0%、「子どもの宿題を確認している」は71.5%と、親は小学校とのやりとりを高い比率で確認していた。次いで、子どもと会話しながら、学校の出来事や友だち、勉強について情報を得ることについて、4～5割の親が「よくある」と回答した。子どもに勉強を教えている割合は「よくある」が38.2%、「ときどきある」が53.1%と必要に応じて行っている様子がうかがえる。

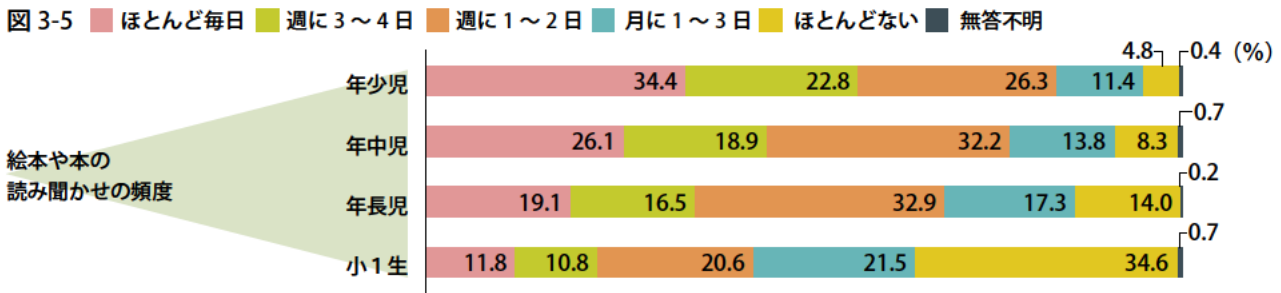




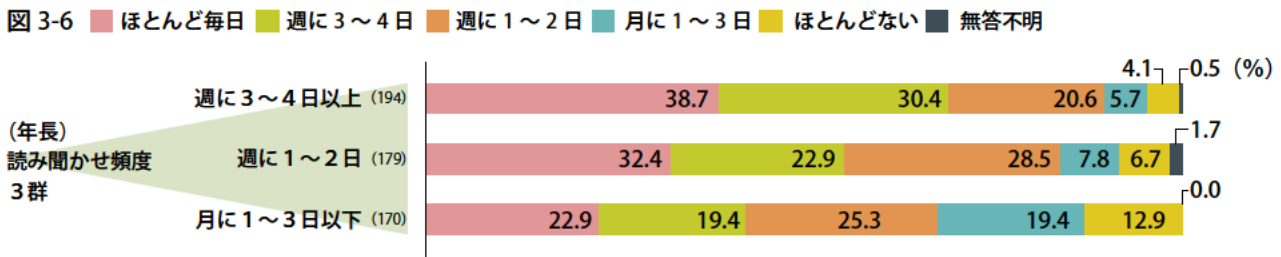
## 子どもの読書と親の読み聞かせ

## Q お子さまが1人で絵本や本を読む(見る)ことはどれくらいありますか？

## 絵本や本の読み聞かせの頻度



## 子どもが1人で絵本や本を読む(見る)頻度(小1)



※( )内はサンプル数。

年長児期に読み聞かせをしているほど、  
小1期で子どもが1人で読書をする頻度が高い。

図3-5をみると、親子で読み聞かせをする頻度は、子どもの学年が上がると減っていた。図3-6で年長児期に読み聞かせを「週に3~4日以上」していた場合、小1期で子どもが1人で絵本や本を読む(見る)比率は「ほとんど毎日」が38.7%で、読み聞かせが「月に1~3日以下」より多かった。年長児期に読み聞かせをしてもらっていた子どもほど、小1期に1人で絵本や本を読む(見る)頻度が高い傾向だった。親子の読み聞かせが、子ども自身の絵本や本への関心を高めると思われる。

# 4 小1期の学習態度と年長児期の親の関わり

年少児期から小1期の幼保小接続の時期に注目しました。

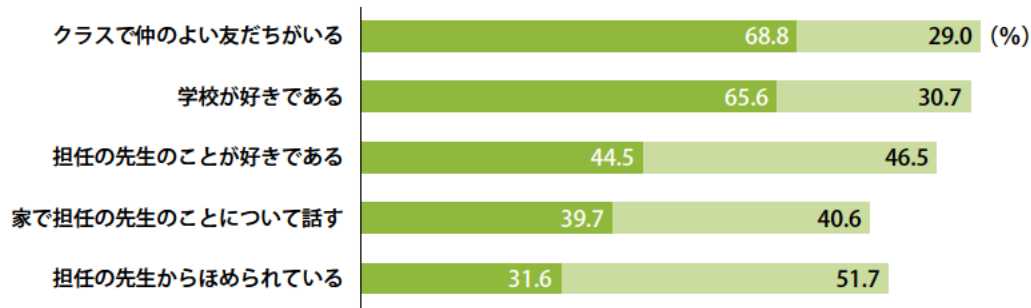
子どもたちはどれくらい小学校に適応しているか、年長児期から小1期のプロセスで、親はどのように子どもと関わるとよいかについて分析しました。

## 小1での学校生活と家庭学習の様子

### Q お子さまは、どれくらいあてはまりますか？

#### 学校との関係 (小1)

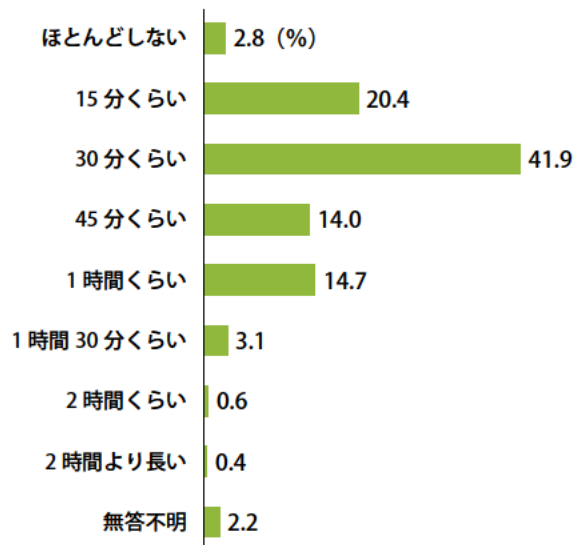
図 4-1 ■ とてもあてはまる ■ まああてはまる



### Q お子さまは平日、家でどれくらい勉強していますか？

#### 平日、家での勉強時間 (塾・学童保育での勉強時間を除く) (小1)

図 4-2

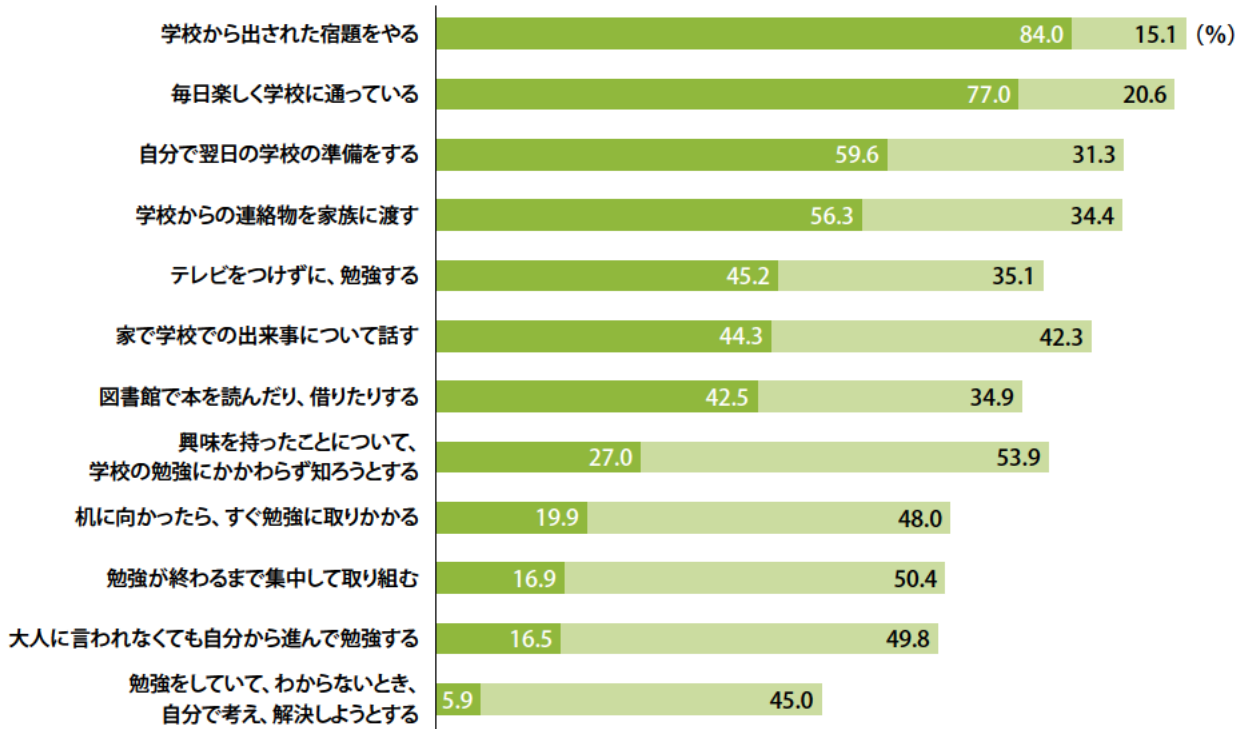




## Q 現在、お子さまは、どれくらいあてはまりますか？

### 家での学習の様子(小1)

図 4-3 ■ とてもあてはまる ■ まああてはまる



**小1で、子どもが「学校が好きである」割合は96.3%。家庭学習では、集中したり自分から進んで取り組む子は6割台。**

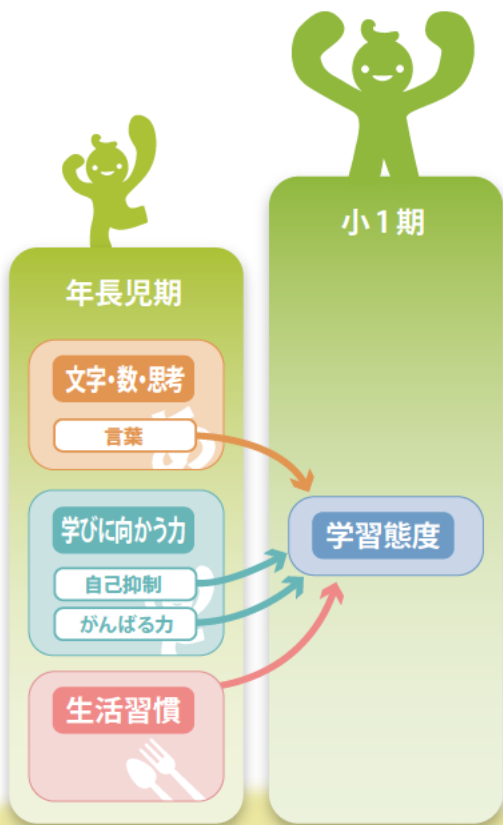
図4-1をみると、小学校との関係では、「クラスで仲のよい友だちがいる」が97.8%、「学校が好きである」が96.3%と、多くの子どもが楽しく学校生活に適應している様子うかがえる。

図4-2をみると、家庭での学習時間は、「30分くらい」が41.9%ともっとも多く、「15分くらい」から「45分くらい」を合わせると約76%だった。図4-3をみると、家での学習の様子について「学校から出された宿題をやる」は99.1%、「自分で翌日の学校の準備をする」は90.9%と、学校に関する項目は9割以上の子どもが行っていた。一方、「机に向かったら、すぐ勉強に取りかかる」は67.9%、「勉強が終わるまで集中して取り組む」は67.3%、「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」は66.3%、「勉強をされていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする」は50.9%と5~6割にとどまった。小1の時点で、家庭で学習に集中したり、自分から進んで取り組んだりすることに差がみられることがわかった。

# 4 小1期の学習態度と年長児期の親の関わり

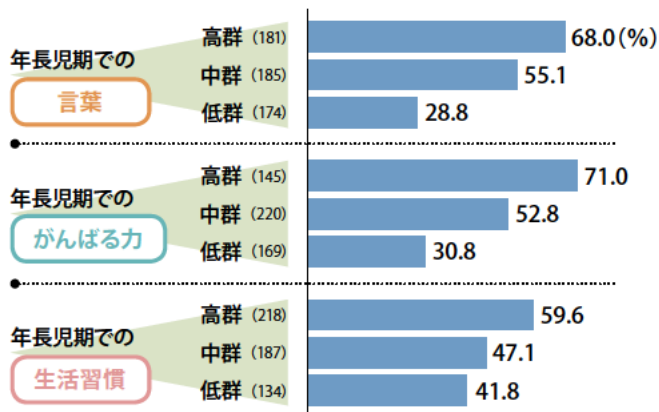
## 年長児期から小1期の学習態度の形成

図 4-4



### 勉強をしていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする(小1)

図 4-5 とてもあてはまる+まああてはまる



※得点の出し方：各項目において、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出した。すべて回答した人のみ分析した。

※生活習慣3群：「夜、決まった時間に寝ることができる」「脱いだ服を自分でたためる」「食事が終わるまで、席に座ってられる」「好き嫌いをなく食事ができる」「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」「家で遊んだ後、片付けができる」の7項目について算出し、平均点を3区分した。

※がんばる力3群：「物事をあきらめずに、挑戦することができる」「一度始めたことは最後までやり通せる」「自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとする事ができる」「どんなことに対しても、自信をもって取り組める」の4項目について算出し、平均点を3区分した。

※年長児期の言葉3群：13ページ参照。

※( )内はサンプル数。

### 解説

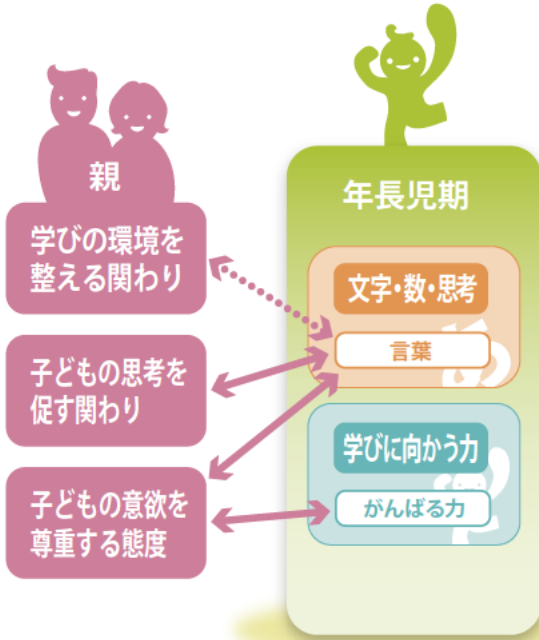
## 年長児期の「生活習慣」「がんばる力」「言葉」が、小1期の学習態度につながる。

小1期の学習態度に年長児期のどの力が影響しているかを分析し、影響がみられたものを図示した(図4-4)。ここでは、年長児期の「生活習慣」と「がんばる力」、「言葉」を3群に分け、小1期で「勉強をしていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする」比率を比べた。図4-5をみると、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合計した比率は、年長児期の「がんばる力」高群が71.0%、中群が52.8%、低群が30.8%だった。また、「言葉」高群が68.0%、中群が55.1%、低群が28.8%だった。

年長児期に、学びの土台となる「生活習慣」や物事に挑戦したりやり抜いたりする「がんばる力」、見聞きしたことを人に話したり理由を伝えたりできる「言葉」が身につくことで、園から小学校へと生活が変わるときに学習生活をスムーズに始めることができると考えられる。

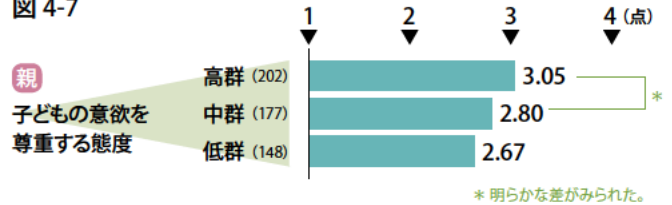
年長児期の子どもの育ちと親の関わり

図 4-6



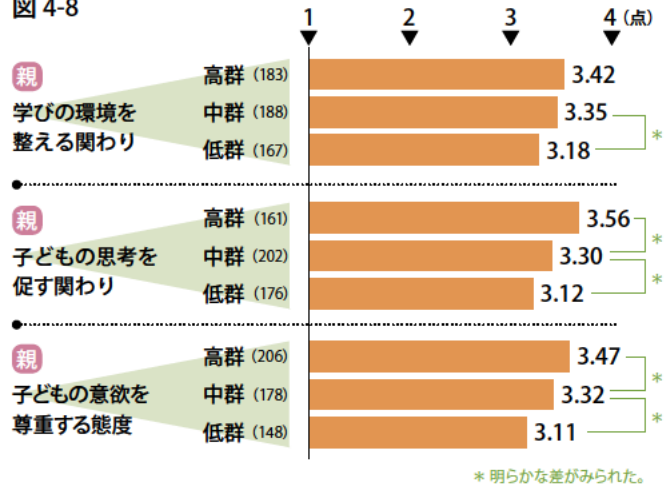
子どもの **がんばる力** 得点 (年長児)

図 4-7



子どもの **言葉** 得点 (年長児)

図 4-8



※がんばる力得点：20ページ参照。

※年長児期の言葉得点：13ページ参照。

※親の学びの環境を整える関わり3群：15ページの4項目について算出し、平均点を3区分した。

※親の子どもの思考を促す関わり3群：15ページの4項目について算出し、平均点を3区分した。

※親の子どもの意欲を尊重する態度3群：「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」「何事にも子どもの意見や要望を優先させている」「しかるよりもほめるようにしている」「しかるとき、子どもの言い分を聞くようにしている」「指図せずに、子どもに自由にさせている」「子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせるようにしている」の7項目について算出し、平均点を3区分した。

※( )内はサンプル数。



年長児期における、親の「子どもの意欲を尊重する態度」や「子どもの思考を促す関わり」「学びの環境を整える関わり」が子どもの「言葉」の力を支える。

親の「子どもの意欲を尊重する態度」、「子どもの思考を促す関わり」、「学びの環境を整える関わり」を3群に分け、子どもの「がんばる力」得点と「言葉」得点をみた。親の関わりが関係していたものを図示した(図4-6)。図4-7をみると、「がんばる力」得点は、親の意欲を尊重する態度で高群が3.05点、中群が2.80点、低群が2.67点と、親が子どもの意欲を尊重している場合、子どもの「がんばる力」が高い傾向がみられた。同様に、親が子どもの意欲を尊重し、学びの環境を整えたり、思考を促したりしているほど、子どもの「言葉」の力が高い傾向がみられた。年長児期に、親が子どものやりたい気持ちを大切に、子どもが自分で考えられるようにしたり、学びの環境を整えることが、子どもの育ちを支えると思われる。

# 調査から読み取れること

## 調査から見えてきた 《学びに向かう力》の育ち

無藤 隆  
白梅学園大学教授



保護者に子どもが3歳から年に1回、質問紙での調査を行い、小学校1年生までのデータを積み上げてきた。近年、幼児教育の世界でしばしば話題になる「非認知能力（社会情動的スキル）」を《学びに向かう力》と再定義して、それらと言葉や文字の獲得、親の関わり方など関連づけて検討している。特に、同じ人たちの縦断調査なので、単に互いの関連があるということよりは強い関係であると言えよう。もちろん、この調査は保護者から見てということなので、その限界があり、さらに、調査の中で調べていない要因が効いている可能性もある。それらの点は慎重に解釈する必要がある。

何よりの大きな発見は子どもの学びが育つプロセスを示唆できたことである。《生活習慣》の大事さはしばしば強調される場所だが、年少児のものが年中児の《学びに向かう力》に影響する点が注目できる。また年長児の《生活習慣》が小1の学習態度に影響する。《学びに向かう力》とは、「協調性」や「がんばる力」、「好奇心」や「自己抑制」などからなるが、年中児の「協調性」が次の時期を規定し、また、年長児の「自己抑制」や「がんばる力」は小1の《学びに向かう力》や学習態度に影響をしている。《文字・数・思考》は3歳からその発展の中で伸びていくが、その中で年長児の「言葉」の力は年中児の時点での「協調性」を受けて伸びている。さらに年長児の「言葉」は小1の《文字・数・思考》とともに、《学びに向かう力》と学習態度に影響する重要な働きをする。

このように見ていくと、《学びに向かう力》としてまとめたいいくつかの子どもへの傾向は、小学校での学習、とりわけ学習態度を形成する上で重要なことが分かる。また、そのどの面が重要かは年齢により異なるようだ。ただし、それがすべてではなく、《文字・数・思考》はそれとして独自の発達経路をたどりつつ、《学びに向かう力》と相互に影

響し合っている。《生活習慣》もまたそれとして発達を遂げつつ、学習態度へと影響する。

純知的な面としての言葉や文字の読み書き、考えることなどは、得意な子どもは早くから得意ではあるが、さらにそれらを伸ばすものとして《学びに向かう力》の一部が影響している。《学びに向かう力》は、小学校1年生で重要なものとして学習態度と相互に規定し合う関係にあるが、おそらく今後、小学校全体の学びを規定する土台として働いていくことだろう。なぜなら、小学校での学びの土台は、学ぼうとする意欲と集中力と、学びを持続し、難しいことに挑戦していくことから成っているからである。

## 子どもの育ちを捉え 支えていくために

秋田 喜代美  
東京大学大学院教授



4年間にわたる縦断研究により幼児の育ちに関して、大きく3点のことが明らかになった。第一は、幼児期に伸びる部分とあまり伸びていない部分、小学校入学後にむしろ下がる部分があるということである。年齢に伴って何もかもが育つのではなく、育ちについて注意して捉えるべき側面が見えてきた。《文字・数・思考》は順調に伸びているが、《生活習慣》は食事の好き嫌いや片付けの伸びは十分ではない。《学びに向かう力》の中の「がんばる力」としての挑戦や最後までやり遂げること、工夫し達成しようとするなど、1年生のほうが下がっている。学業に直結する部分は伸び、生活習慣や課題を成し遂げる非認知スキルは、伸びは十分とは言えない。これは、保護者がこれまであまり重視していなかった点ではないだろうか。生活、遊び、学びの中で子どもは育つ。多面的視点からの支援が大切である。

そして第二には、3つの力の育ちの順序性が縦断研究だから見えてきた。3歳時期までの《生活習慣》が4歳の《学びに向かう力》としての「協

調性」や「がんばる力」を育てること、その《学びに向かう力》が5歳児の《文字・数・思考》を育て、その《文字・数・思考》や《学びに向かう力》としての「がんばる力」が学習態度を育てていくというような関係性が見えてきた。まず生活習慣の確立、そして遊びを通して学びに向かう力を培うことが小学校以降で学習に求められるスキルや態度を育てていく。早期から文字・数・思考の教育だけに力を入れるのではなく、この順序性を大事に幼児期にふさわしい暮らしと遊びを通して学びに向かう力を培うことの大切さをこの結果は示唆している。これは保護者にとっても安心し納得できる順序だろう。

そして第三には、保護者の関わりと子どもの育ちの関係である。速報版には示されていないが、親の学歴や年収、保育所か幼稚園かといった施設制度に関わりなく、保護者の養育態度や関わりが子どもの育ちに影響を与えていることが明らかになった。子どものやりたいことを尊重し気持ちを受容し子どもの意欲や主体性を培う、そして思考を促す関わりが言葉の力を育てる。21世紀に求められる学習スタイルや態度を育てるには、学びの環境を文化的に豊かにするとともに子ども自らが能動的に考える機会を保障すること、それが育ちを支えていくことをこの結果は示している。

## 幼児期から児童期の分析を通して

荒牧 美佐子  
目白大学専任講師



4年間にわたる縦断調査の結果、幼児期から児童期にかけて、子どもたちのスキルがどのように変化するのが見えてきた。まず、《文字・数・思考》については、かな文字の読み書きや簡単な計算スキルは、年齢とともに順調に上がっていく。しかしながら、自分のことばで順序をたて、相手にわかるように話せたり、きちんと理由を説明したりする力は、小学校への入学前後で特に変化

はなかった。したがって、こうしたスキルを身につけられるかどうかには、個人差があると推察される。

続いて、《学びに向かう力》については、年齢の上昇による大きな変化は見られないが、年少児からすでに高い水準を保つスキルもある。例えば、新しいことへの好奇心を持つ子どもの割合は、年少児で94.8%に達している。したがって、幼児期の子どもは誰も好奇心旺盛であり、重要なのは、それをいつまで保つことができるかだと言えるかもしれない。また、「がんばる力」や「自己抑制」については、項目によって差はあるものの、小学1年生でも全員が十分に身につけているとは言えず、個人差があるようだ。夢中になっていることを中断して、次のことに移ったり、うまくいかないことでも最後までやりとおしたりする力は、子どもにとって気持ちが乗らないことに対しても、前向きに取り組めるかどうかにつながる力である。小学校に入学すると、幼稚園や保育所にいたときよりも、やらなければならない課題が明確となるし、たいていの場合、それらは決められた時間内で取り組まなければならない。ある程度の継続力も求められる。したがって「がんばる力」や「自己抑制」を幼児期から児童期にかけて、どのように身につけていくか、今後さらなる検証が必要だろう。

そして、《生活習慣》の自立が《学びに向かう力》や《文字・数・思考》に関与していることがわかってきた。こうしたことから、子どもが幼児期に身につけるこれらのスキルは、互いに影響し合い、それらがやがて、児童期における“学ぶ力”の土台となっていくと言えそうだ。

以上のことを踏まえ、幼児期に親はどんなことに気をつければよいのかを考えてみると、何か特別な教育や関わりが、決定的な効果をもつと断定するのは難しそう。むしろ、絵本の読み聞かせや親子の会話を大切にするなど、日々の小さなやりとりの積み重ねが、子どものスキル獲得につながるのではないだろうか。何かを一方的に与えるのではなく、子ども自身がやがて自走できるようになるまで、子どもの発達に合わせて伴走するようなイメージで、焦らず子どもと向き合うことが重要だ。

## 幼児期から 小学1年生の 家庭教育調査 研究会

無藤 隆 (白梅学園大学教授)  
秋田 喜代美 (東京大学大学院教授)  
荒牧 美佐子 (目白大学専任講師)  
都村 聞人 (神戸学院大学専任講師)

高岡 純子 (ベネッセ教育総合研究所主任研究員)  
真田 美恵子 (ベネッセ教育総合研究所主任研究員)  
持田 聖子 (ベネッセ教育総合研究所研究員)  
田村 徳子 (ベネッセ教育総合研究所研究員)

※肩書き・所属は、刊行時点のものです。

- 速報版はベネッセ教育総合研究所のWEBサイトからダウンロードできます。

<http://berd.benesse.jp/jisedai/>

- 引用・転載については、下記にてご確認ください。

<http://berd.benesse.jp/application>

- 本調査に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」係

TEL: 042-311-3390

受付時間10:00~17:00(12:00~13:00と土日祝日除く)



速報版

## 幼児期から小学1年生の 家庭教育調査

縦  
断  
調  
査

発行日 ● 2016年3月8日

発行人 ● 谷山和成

編集人 ● 木村治生

発行所 ● (株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

企画・制作 ● ベネッセ教育総合研究所

〒206-0033 東京都多摩市落合1-34

デザイン ● 中村ヒロユキ (Charlie's HOUSE)